

革マル追随分子の闘いで逃亡した あふり出さん

革マル追随分子 新行義 丹治 (国労・津) たんじ (田沼27)

日刊 動労千葉

85. 10. 14

No. 2063

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一八 (動力車会館)
(鉄電)二九三五六 (公衆)〇四七二二七二〇七

当局「動労革マル」体のスト圧殺「組織破壊 攻撃粉碎し、10/20ハルスト」

動労「本部」革マルは十月一日、津田沼電車区潜入革マル追随分子・丹治義行を国労から脱退させ、動労「本部」に加入させた。これは、国鉄当局の大量不当処分「雇用安定協約」を恫喝材料とした屈服、首切り攻撃と軌を一にした許しがたい国鉄労働運動解体攻撃である。
怒りの決起で動労「本部」革マルを追放・一掃しよう。

当局と一体となつた

闘争破壊策動

今回の動労「本部」革マルの行為は、第一に動労千葉のストライキ方針においてめられたあがきであり、第二に、総武線―首都圏の拠点たる津田沼の動労千葉・国労の組織かく乱―反撃の拠点破壊を狙ったものである。これが「本部」のいうところの「内部の闘い」なのだ。

丹治なる男は、そもそも津田沼潜入革マル分子嶋田誠の自宅に足繁く出入りし数年前には、嶋田と結託し国労青年部の選挙妨害を行い、分会青年部から糾弾された革マル追随分子である。

しかも嶋田とともに国労・協会系役員に取り入り、自らの正体をかくそうとしていた卑劣分子である。

今回のやり方は、嶋田誠が動労「本部」との組織争闘戦の決定的時期に本性をあらわし、動労千葉を脱退し組織かく乱を狙ったのとウリ二つだ。
この卑劣な策動を絶対許すな。

全国鉄労働者の怒りで

革マル分子を叩きつぶせ

丹治は、十月一日付で、日本フレイトライナーに出向し、職場にこないのをい

いことに「国労脱退にあたっての私の決意」と称し、言いたい放題下劣な本音を書いている。

日く「(組合は)加入することにより得られる利益が成員の関心の中心となる結合体」「動労は国鉄職員という身分を守る(身分を失すれば住宅ローンもかりられないし、サラ金からだって相手にされなくなるのは明白だ)という考えに基き出向・派遣に積極的に取り組んでいる」「なにもしない、やらない、ゴネルだけのダダッ子(国労)に誰も耳をかたむけない」・・・と言っているのである。

怒りなしには一行も読めない。当局の狙いは国鉄労働者をこうした奴隷のごとき労働者に仕立て、権利も何もない中でいいようにこきつかい、いつでも首を切れるようにすることなのだ。

これが許せないからわれわれは、血を流してでも闘うのだ。革マル分子をのさばらせていては、それこそ寝首をかかれしてしまう。
十一月ストを軸とする怒りの決起で叩きつぶそう。

訂正

十月十一日付『日刊』第二〇六一号の本
文上段十一行目「乗務員の勤務等改正」
を「列車乗務員の勤務等改正」に訂正します。